

満洲国崩壊後の延辺朝鮮族自治州の土地改革

——和龍県のA村の聞き取り調査を中心に——

金 美花

一、はじめに

1. A村の概況
2. 聞き取り調査と問題提起

二、満洲国期の村の土地所有形態

1. 地主所有
2. 東拓と自作農

三、土地改革過程

1. 民主大同盟の指導から「民運工作団」の指導へ
2. 農会と貧雇農団
3. 階級成分の確定
4. 政治・経済闘争の対象となった人たち
5. 偏差の是正と土地分配
6. 村人の移動

四、結 び

1. 土地改革がもたらしたもの
2. 土地改革過程における問題点
3. 土地改革後の課題

キーワード：間島、民族問題、工作隊、階級成分、東拓と自作農創定地、土地分配

一、はじめに

1. A村の概況

延辺朝鮮族自治州（以下延辺と略す）は中国吉林省に属し、6つの市と2つの県を含み、面積は42,700km²、人口は2,079,902万人で、その内、朝鮮族は821,479人である⁽¹⁾。満洲国期には間島省となり、1945年の満洲国崩壊後は間島臨時

政府を経て延辺行政督察専員公署となっていた。A村とは現在の延辺の和龍県に属し（1940年以前は延吉県に所属）土地改革時には一つの行政村であり、1965年に二つの行政村に分けられた村であるが、本論ではA村と総称する。間島最大の平崗平野に位置し、延吉市・龍井市・和龍市を結ぶ延和道路沿いにあり、東へ15キロ行くと龍井市へ、西へ5キロ行くと和龍市の頭道溝鎮に通じる、交通至便な村である。

龍井市と頭道溝鎮は満洲国期において村人がよく通った市場と商品の取引先であった。農産物については、いまほとんど龍井市、頭道溝鎮へ売りに行く。A村の農地は延和道路を挟んで南北に分かれるが、道路南側の海蘭江沿いの平野部は水田で、南側の道路沿いと道路の北側の丘陵は畑と果樹園になっている。果樹はリング梨（リングと梨の混合種）が中心で、畑では大豆などを栽培し、経済作物としては黄色葉煙を栽培している。A村は開拓から現在までずっと農業を中心とする村である。

現在、村の人口は1,425人、戸数は474戸、そのうち朝鮮族の戸数は453戸、漢族の戸数は21戸で、村は7つの自然村落で構成されている（満洲国期には9つ）。延辺における米の主要産地であり、タバコの主要原料である黄色煙草の重要な産地でもある。また、リング梨は延辺の

(1) 金東和・金承哲『当代中国朝鮮族研究』延辺人民出版社、1992年、136頁。延辺は1952年延辺朝鮮族自治州が設立され、1955年には延辺朝鮮族自治州と改称さ

れた。本論では、間島、韓人、朝鮮人、中国人をそのまま歴史用語として使い、現在の用語としては、延辺、朝鮮族、漢族という用語を使うことにする。

特産で農民の経済収入源であるが、最近果物の種類が増えるにつれ、市場での需要が減っている。農民の生活水準は延辺農民の平均を上回る程度であると考えられる。

2. 聞き取り調査と問題の提起

本論では満洲国崩壊後延辺で行われた土地改革の事例としてA村をとりあげ、土地改革の展開過程の実態を明らかにしたい。

満洲国成立以前、延辺は日本と中国が領土問題で争い、日本と中国官憲が朝鮮人を巡って争った地域であり、さらには抗日民族運動が激しく展開された地域である。満洲国期において延辺は日本が朝鮮と満洲を支配する上での重要な意味をもつ地域であった。1942年の延辺人口は834,102人で、その中で朝鮮人が617,987人であった⁽²⁾。日本は延辺を支配するには朝鮮人、特に当時延辺人口の約80%を占める農民を押さえなければならなかった。

1945年8月以後、「中ソ友好条約」の規定によって、ソ連は東北を解放した後、長春、瀋陽などいくつかの東北の大都市を含む東北の主権を国民党政府に統治させた。1946年3月国民党は瀋陽を占領したあと、四平、長春、吉林を占領し、国民党の先峰部隊は松花江岸まで着いた。1946年5月下旬中国共産党吉林省委員会所在地は吉林から撤退し、蛟河・敦化を経て、8月17日に延吉に移転することになり、吉東分省委（延辺地区委員会と吉東地区委員会の合併）と同じ場所に設置された。中国共産党の兵器工場は南満から延辺に移転して、龍井近くのいくつかの地域及び琿春に作られていた。国民党は「一周間以内図們江岸に進撃し、東北全体を奪い返す」⁽³⁾と揚言した。中国共産党にとって大

変困難な時期であった。

国民党は抗日戦争の勝利を取るために、延辺に大量のスパイ、軍隊を設立するリーダを派遣して、満洲国期の残余勢力を集めてひそかに土匪武装（軍隊）をつくっていた。「先遣軍」・「挺身軍」・「保安隊」などである。これらの組織は一般の土匪と異なり、中国共産党と人民を敵視した政治土匪であり、国民党軍の別働隊であった。これらの土匪は各地を占拠して、「反共保民」（共産党に反対し民衆を保護する）・「迎接中央」（国民党の接收を歓迎する）という旗を掲げ、人民政権と人民の生命財産に脅威をもたらしていた。したがって1945年に組織された延辺地委（中共延辺地区委員会、以下省略）は、延辺各地で土匪を包囲討伐した。1946年7月には、延辺各地で四、五千人の土匪を殲滅した結果、ほとんど消滅し、一部のリーダは国民党の統治区に逃げ、残余勢力は山奥に逃げたが、共産党と人民政府軍の一連の厳しい工作によって投降した⁽⁴⁾。

このような土匪に対する討伐は解放区の社会秩序を維持し、民心を安定させ、土地改革の運動を展開して東満根拠地を建設する好条件をもたらした。特に汪清・敦化・安図の土匪を肅清することによって、東満地区の鉄道の二つの大動脈である牡図線と長図線の拉法から図們までの鉄道が運行することができ、東満と北満、東満と南満との連絡（朝鮮経由）を保証し、延辺は東満根拠地の役割を果たした。東北が共産党と国民党に分断された状況のなか延辺は交通用地となった。延辺は当時吉林省における中国共産党が統制する全地域の80%を占めていた。

したがって、延辺は東北で唯一「完全な解放区」で、国民党の勢力が及ぶことがなく、国民

(2) 満洲国通信社『満洲国現勢』1943年、クレス出版、240頁。

(3) 雍文濤「創建延辺根拠地の往事」『解放初期的延辺』政協延辺朝鮮族自治州文史資料委員会、遼寧民族出版

社、1999年、51頁。

(4) 邱会魁・文正一「延辺剿匪」前掲『解放初期的延辺』、133頁。

党軍隊も介入できない、中国共産党の東北における「腹心区」（比較的安全な地域）であった。しかも、群衆基礎（中国共産党を支持する思想的基盤）もよく、全人口の多数を占める朝鮮族は国民党に幻想を抱かず、国民党に対していわゆる「正統観念」を持っていなかった⁽⁵⁾。

このような歴史的・社会的・民族的に特殊かつ複雑な地域であった延辺の土地改革について論じた先行研究としては、南起「延辺的土地改革及其歴史作用」⁽⁶⁾があり、延辺の土地改革全体の流れを概観している。しかし、中国共産党の土地改革政策が村で具体的にどのように展開されたかについては論じていないため、実態は必ずしも充分には明らかにされていない。

土地改革については、日本の代表的研究として、田中恭子による研究⁽⁷⁾があり、内戦期の中共の土地改革政策が時には急進的になり、時には穏やかになって、揺れ動いたことを政策的に明らかにした。東北の土地改革を取り上げた研究としては、小竹一彰の研究⁽⁸⁾があり、『人民日報』・『東北日報』の農村大衆運動に関する報道件数を集計する方法で、大衆運動の特徴や

傾向の変化を明らかにした。中国の代表的な研究としては、郭徳宏の研究があり、各時期の中国共産党の土地問題に関する認識と政策が、どこが正しく、どこが間違っていたか、ある政策は理論の上では正しくても、実際に実行されていなかったり、逆方向に走ってしまったりしたことなどを論じた。また、土地改革における「土地の平等分配」の評価に関しても、「中国共産党が一時それを提起したとしても、それを続けて肯定するのではなく、今日改めて『実事求是』（事実に基づいて事に当たる）的な態度で論議すべきである」⁽⁹⁾と論じていた。

田中・小竹・郭の先行研究はそれぞれ視点と対象とを異にししながら、中国の土地改革の性格を明らかにしようとしているが、延辺に十分な焦点が当てられていない。

本論では、延辺において土地改革が具体的にどのように展開されたか、A村を事例として考察する。

筆者は、A村へ数回赴き60歳以上の人を訪問して、満洲国期における村の土地所有形態、土地改革期の地主、富農や「漢奸」に対する闘争、

(5) 「正統観念」について、1948年延辺地委書記をしていた劉俊秀は延辺地委で工作していた時を回想したとき「東北の漢族人民は正統観念があり、共産党に対する認識が不足していた。彼らは始めのうちは国民党が良いと思ったが、しばらくして国民党に失望するに至った」と言い、「朝鮮族人民はなにも正統観念が存在しなかった」と語り、「敦化県書記である楊尚奎が多く土匪に包囲されたとき、敵の攻撃によって当時8つの人民武装の大隊のなか7つの漢族大隊はみな投降したが、一つの朝鮮族大隊だけが最後まで堅持した。」と語った。「在延辺地委工作期間的回憶」前掲『解放初期の延辺』244頁。

延安から来た幹部である雍文濤（1945年11月中国共産党延辺地方委員会書記を歴任）は「創建延辺根拠地的往事」のなかで朝鮮族の革命伝統につきのように言った。「延辺の朝鮮族人民は革命伝統を持っている。彼らはマルクスレーニン主義を受け入れ、中国共産党を擁護し、漢族同胞と団結することができ、最も強い自我犠牲的な革命精神を持っている。東北抗日戦争時期、延辺には4,500人余りの革命烈士がいるが、そのなか朝鮮族の人は93%を占めている。」また、解放初期

「朝鮮族群衆の家には毛澤東の肖像を掛けていたが、漢族の家には往々にして蒋介石の肖像を掛けていた。」と語った。前掲『解放初期の延辺』52、58頁。

「1947年7月中国共産党和龍県委員会は全県漢族の中学校、小学校教師学習班を開き、県内教師は初めてマルクスレーニン主義啓蒙教育を受けた」とする。和龍県地方誌編纂委員会『和龍県誌』吉林文史出版社、1992年、622頁。

「延辺の山々には金達萊（つつじの花）が咲き、村々には烈士碑がある」といわれている。延辺抗日烈士一覧表によると延辺抗日烈士は3,125人で、そのなか朝鮮族が3,026人である。崔聖春主編、『延辺人民抗日闘争史』民族出版社、1999年、参照。

(6) 南起「延辺土地改革及其歴史作用」前掲『解放初期の延辺』、1999年。

(7) 田中恭子「内戦期の中共土地改革における『左傾傾向』のは正過程(Ⅰ)」『アジア経済』22-3、1981年。

(8) 小竹一彰『国共内戦初期の土地改革における大衆運動』アジア政経学会、1983年。

(9) 郭徳宏『中国近現代農村土地問題研究』青島出版社、1993年、567頁。

階級成分の確定、土地分配過程について聞き取り調査をした。

このような聞き取り調査方法は、中国近代史上における農村の変革を村のレベルから理解しようとして「オーラル・ヒストリー」の手法を用いた三谷孝らの研究⁽¹⁰⁾から示唆されたものである。三谷孝らは、1944年南満洲鉄道株式会社調査部の『中国農村慣行調査』で調査した調査村の50年後における追跡調査を目指し、華北の五つの村に直接入って現地調査をし、農民から聞き取りを行ったが、そこから得られた膨大な聞き取り資料の集大成は『中国農村変革家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』⁽¹¹⁾に収録されている。

東北における優れた農村調査研究には、轟莉莉の研究⁽¹²⁾がある。東北の農村社会の人間関係を中心に現地調査を通して考察しているが、土地改革を特に取り上げた研究ではなく、延辺は取り上げていない。

上記の先行研究から研究方法の面で多くを学び、筆者は1936年満洲国が産業調査を行った延辺のA村を調査対象とし、満洲国崩壊後のA村の土地改革を考察することによって、延辺の土地改革の特徴を考察しようとする。

延辺（解放初期に延辺は吉東地区と呼ばれた）の土地状況について、中共吉林省委は以下の特徴があると分析した⁽¹³⁾。

1. 土地の大部分はやはり地主に所有されているが、大きい地主が少なく中小地主が比較的が多いが、そのうちでも新興地主は満洲国と密接な関係がある。
2. 公地が比較的多く、そのなかで多数のよい土地が偽満の時期に佃富農、富裕な佃

中農によって耕作された。

3. 大部分の地方では人口が多く、土地が割合多く、佃貧農が多く、雇農が少ない。
4. 朝鮮農民が全農村人口の大多数を占めている。彼らは吉東地区土地の開拓者〔特に水稻〕である。

このような延辺の土地状況のもとで行われた延辺の土地改革には次のような特徴がある。

1. 延辺は1945年8月15日満洲国支配から解放された。中ソ友好条約によって、国民党が東北を接收するようになり、国民党は東北の都市部を中心に占領し、中国共産党は主に農村部を制圧していた。吉林省においては、延辺は共産党支配地域の80%をしめ、中国共産党にとって延辺は戦略的要地であった。
2. 延辺内部には国民党の接收を歓迎するいわゆる国民党の残余勢力が、共産党の軍事情報を収集し、地下活動をし、山奥には武装した土匪がいて、共産党はこれらの国民党の残余勢力を肅清することが重要な課題となった。延辺での土匪肅清後、「1946年6月には内戦が始まり東北民主連軍が延辺で軍隊を募集した。20日の間に3,659人が軍隊に参加したが、90%以上が朝鮮族で占められていた⁽¹⁴⁾」。土地改革はこのような情勢のなかで行われていた。
3. 延辺の土地改革の問題は階級問題に民族問題が絡んでいるのである。延辺には満洲国期に日本の開拓地、公地があり、自作農の問題があった。土地改革のなかで、

(10) 三谷孝『農民が語る中国現代史』内山書店、1993年。
三谷ほか編『村から中国を読む』青木書店、2000年。

(11) 三谷孝『中国農村変革家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』汲古書院、1999年。

(12) 轟莉莉『劉堡—中国東北地方の宗族とその変容』東京大学出版会、1992年。

(13) 中共吉林省委「省委關於進一步發動群衆分配土地的决定」『中国共産党吉林省委員会重要文献匯編第一冊』吉林省档案馆、1984年、63頁。

(14) 前掲 羅文濤「創建延辺根拠地の往事」『解放初期的延辺』、60頁。

中国共産党は延辺で階級問題と民族問題にとくに適切な措置を取った。たとえば「反奸清算」運動のなかで、「まず朝鮮族群衆を発動して本民族のなかの漢奸を清算した。朝鮮族の一部には日本人の手先となって、一般の人たちを圧迫し、特に漢族の人を圧迫するものがいた。したがって、漢族群衆は彼らを『二鬼子』（日本人は一番の鬼、朝鮮人は二番の鬼）と呼んだ。また減租減息とその後の土地改革運動のなかでは、先ず漢族の群衆を発動して漢族の地主と闘争した。歴史的で、大量の土地を持っていたのは大多数が漢族の人であった。彼らは土地を利用して貧しい農民を搾取し、そのなか多くは朝鮮族の農民であった。したがって階級意識が強い朝鮮族の農民は漢族に不満を持っていた。したがって、延辺の土地改革で、階級問題と民族問題を適切に処理しなければ最後には民族間の闘争が勃発することがさけられない」⁽¹⁵⁾、と中国共産党は認識していた。

延辺農地の30%から50%が東洋拓殖株式会社土地であり、これらの土地は主に漢族の地主から東洋拓殖株式会社が買収したものである。一部は朝鮮族農民が漢族地主から直接土地を買ったものもあるが、その場合東洋拓殖株式会社から借りたお金で支払うことになった。これらの土地は自作農創定地として朝鮮族が耕作していたため漢族は土地を奪われた恨みを朝鮮族に向けた。したがって自作農問題をどう解決するかが民族問題となった。

延辺専員公署は、自作農は延辺に移住

した期間が長い朝鮮農民で、政治的には何の地位もなく、経済的には搾取された側であるとした。したがって、自作農創定地は公地として分配しないと決定することによって、朝鮮族中農と公地、朝鮮族中農と満洲国時期の土地関係の絡んだ問題を解決し、民族間の矛盾を解決した。1946年和龍県では和龍県公地分配委員会を設置したが、委員には「朝鮮人同盟委員長、中国人同盟委員長」を含んでいた。

共産党は満洲国期に公地を耕作していた朝鮮族農民に対しては、「土地の経済関係上敵偽と関係が生じたため、中国農民・公地を耕作しなかった朝鮮農民との間には矛盾が存在し、この矛盾を円満に解決しなければ多くの中韓農民の同情と協力を得ることができない。また、公地を耕作している農民（ほとんど中農）は土地と経済上敵偽と絡んでいるが、彼らは本質的にはやはり農民で、敵偽に搾取された側で、彼らと耕地の『管理人』『仲介人』『悪い楔長』を厳格に区別するべきであり、農民に対する説得解釈をして、農村の基本群衆との間のわだかまりと争いを解消するべきである。」⁽¹⁶⁾とした。

本論では、延辺の複雑な政治的背景のなか、階級問題と民族問題とが交錯した構造のなかで、地主との闘争問題、自作農（中農）問題、「漢奸」問題、中農にまで及んだ闘争対象の問題がA村ではどのようにして発生したか、その実態を考察することで延辺土地改革の特徴である階級問題と民族問題の関係性を明らかにしようとする。

解放直前になると、延辺の土地は1936年産業調査当時とくらべて自作農が増えたことがわかる。

(15) 劉俊秀「在延辺地委工作期間的回憶」前掲『解放初期的延辺』、243～244頁。

(16) 中共吉林省委「省委關於分地問題的一些決定」『中

国共産党吉林省委員会重要文件匯編 第一冊』吉林省檔案館、1984年、181頁。

A村の解放直後の具体的な土地所有状況は資料が文化大革命のときに紛失した結果明らかにすることができないが、村で闘争の対象になった中農の数が多いことから、土地のある程度の分散化はあったと考えられる。これは自作農創定地と関係があると考えられる。

土地改革の目的は、経済的には封建的土地所有制を覆し、農民の土地要求を満足させ、生産力を上げることであり、政治的には貧しい人たちが「翻身」することであった。中国共産党の土地改革における基本原則である「階級路線」は「雇農、貧農をして中農と強固な同盟を結成させ、富農に配慮し、地主階級を分化させ、集中的に大地主、大漢奸、悪党の土匪リーダーを打撃し、あまりたくさん敵を立てないこと」⁽¹⁷⁾であった。この「階級路線」は中国全体に関する原則であるが、延辺では「階級路線」に加えて民族問題がどのように解決されたか。

延辺全体として階級問題に加えて民族問題が絡んでいる構造となっていたが、それは土地改革のなかでどのように解決されることになったかをA村を事例として具体的に考察しながら、延辺の土地改革の特徴である階級問題と民族問題の関係性を考察しようとする。

二、満洲国期の村の土地所有形態

1. 地主所有

満洲国崩壊後、1946年から土地改革が進められたが、当時の村の土地所有状況をまず概観して見よう。

1945年満洲国崩壊当時の村の土地所有状況に

関する統計資料は現在のところ見当たらないが、1936年満洲国産業調査報告統計と村の農民の話をもとにすると、A村の土地所有形態は次のようであった。

土地の大部分は劉氏、孫氏、東洋拓殖株式会社間島支店（以下東拓と略す）その他不在地主である楊氏などが所有していたと言われている。いまも村には「楊家地方」、「孫家地方」、「東拓地」などの呼び名が俗名として残っているほどである。『和龍県地名志』ではA村にある北側の自然村落の名は「初めは劉風春地方と呼んでいた」⁽¹⁸⁾と記載されているほど、村落の地名は有力な土地所有者の名前に由来するものが多い。

村の大きな地主は全部漢族であった。漢族のほとんどは山東省の出身で、朝鮮族のほとんどは咸鏡北道出身である。漢族も朝鮮族も親族関係、故郷を同一にするのが特徴である。7つの自然村落があるA村の中での2つの自然村落はほとんどの人たちがいまも親戚関係である。

劉氏地主は1892年ごろ山東省からA村に来了。1936年当時「部落民ノ大部分ハ劉家小作人トシテ生活シ宅地ヲ小作附加物トシテ借用」⁽¹⁹⁾していた。「宅地が全部劉地主のもので家賃は旧正月前日に収めていた」⁽²⁰⁾という。劉氏地主の5人息子は全部この村にいたが、解放後引っ越しして、現在その子孫はだれも村にはいない。劉氏一族は分家していたが、その中の一人は1936年当時25.45日耕⁽²¹⁾の土地を所有し、大きな果樹園を持ち、高い土塀に囲まれた大きな家に住んでいた。雇農も雇っていたが、その雇農の子孫は現在も村にいる⁽²²⁾。

楊氏は龍井に住んでいた不在地主で、38日

(17)注(13)に同じ。

(18)和龍県地名志編輯委員会『和龍県地名志』1984年、65頁。

(19)満洲国国務院実業部臨時産業調査局『農村実態調査報告書 戸別調査之部 第二分冊 延吉県 楊城村』1936年、378頁。

(20)鄭 b j（以下聞き取り相手の名はイニシャルで表す

ことにする）聞き取り訪問、2001年9月1日、70歳。

(21)前掲『農村実態調査報告書 戸別調査之部 第二分冊 延吉県 楊城村』、334頁。なお、この調査報告書では、1日耕は1晌、1晌=2,880弓、1弓=5尺横縦、1尺=31.51センチとした、560頁。

(22)安 s k聞き取り訪問、2001年8月31日、70歳。

耕⁽²³⁾の土地を所有し、代理人が村に住み込んで小作農を管理した。

筆者が2000年4月30日に訪問した金h g氏は、そのときの様子について次のように言った。

このあたりは楊家地方と呼んでいた。楊地主は龍井に住み、代理人が村で見張をしていた。…楊氏地主の息子がときどき自転車で見に来た。当時自転車を持っているのは大金持ちに限る。秋に脱穀して麻袋に入れて木炭自動車に詰んで米を持っていった。⁽²⁴⁾

孫氏はA村に在住していたが、その地主が在住していた自然村落には1936年時点で、耕作農家8戸で、耕地は59.7日耕であったが、孫氏の所有耕地は58.6日耕、所有廢耕地は3.0日耕で、小作料は折半であった⁽²⁵⁾。しかし、孫氏は解放前になくなったため、土地改革における闘争の対象にはならなかった。

間島には帰化した朝鮮人名義で幾人かの朝鮮人が共同で土地を購入する特殊な「佃民制度」があり、A村内の1つの自然村落は全部朝鮮人で、しかもほとんどが親戚関係であったが、その中の帰化した朝鮮人が中国人地主の土地を買って佃民制度をとっていた⁽²⁶⁾ため「あまり地主の圧迫を受けなかった」⁽²⁷⁾という。その自然村落には1936年当時帰化した朝鮮人一人が2.8日耕程度の土地をもった朝鮮人小地主⁽²⁸⁾としているぐらいであった。

土地所有権がなく資本もない朝鮮人たちは、中国人地主の土地を小作していた。A村の大半の土地はもともと楊樹がいっぱい茂って、狼や

雉などもよくみられる未墾地であったが、朝鮮人たちは楊樹の根を多く抜いて次々と開墾して農地とした。開墾した畑は最初の三年間は、小作料を地主に納めなくてもよい慣習になっており⁽²⁹⁾、「4年目から地主に3、自分（小作人）が7、その後は収穫の半分以上を地主に納めていた」⁽³⁰⁾。したがって朝鮮人たちは3年間は小作料を納めなくてもよいこうした荒地を開拓するために移動する人も多かった。中国人の地主はこのような朝鮮人たちが開墾した畑の小作料を得て財産を増やしていった。

1936年当時と10年後の1945年とをくらべると土地所有の変化は大きい、そのひとつには自作農が増えたことである。土地改革後のこのA村の階級成分をみてもわかるように約三分の一の戸数が自作農であった。

当時延辺全体としても自作農は30%ぐらいであった。

2. 東洋拓殖株式会社間島支店と自作農

東洋拓殖株式会社（以下東拓と略す）間島支店は朝鮮人農民が主に利用する金融機関であった。「1935年当時東拓は資金がなく自分の土地が得られない農民に自作地を得るように融資していた」⁽³¹⁾。

1936年間島省は、以下のような自作農創定実施計画を立てた。

本省農家の四割は純小作人にして之等は移動性多き為常に転々移住し殆んど流浪生活に等しき状態を持續し郷土觀念乏しく尚ほ定着性極めて少きを以て之が一定の地に愛着せし

(23)前掲『農村実態調査報告書 戸別調査部 第二分冊 延吉県 楊城村』557頁。

(24)金h g聞き取り訪問、2000年4月30日、66歳。

(25)注(23)に同じ。

(26)前掲『農村実態調査報告書 戸別調査部 第二分冊 延吉県 楊城村』、342頁。佃民制度とは帰化した朝鮮人を土地執照（地券）の名義人として実際は帰化していない数人又は数十人が共同で土地を所有することである。この執照名義人を「地方主人」と称し、事

実上多数の所有者を佃民と称した。

(27)注(22)に同じ。

(28)前掲『農村実態調査報告書 戸別調査部 第二分冊 延吉県 楊城村』452頁。

(29)前掲『農村実態調査報告書 戸別調査部 第二分冊 延吉県 楊城村』、483頁。

(30)注(22)に同じ。

(31)中国人民政治協商會議龍井県委員会文史資料研究委員会『龍井文史資料第2輯』1988年、朝鮮語版、28頁。

め将来永久に幸福を保持せしむるには耕地を所有せしむること最も必要なるのみならず堅実なる農村建設上より見るも至急肝要なる事と信ず。元来自作農創定事業は相当難事に属すと雖も本省の如く耕地広大にして且つ地価格安等好条件を具備する地に於ては此種施設容易に其の目的を達し得べきものなるを以て其の努力如何に依り左程難業にあらざるものと思料す。然れども耕地全面積を所有せしむるは相当の資金を要するを以て全面積半分即ち一戸當耕地面積を約四陌とすれば其の五割即ち二陌のみを自作農地たらしむべき方針である。換言すれば自作兼小作主義を以て実施せしめんとす。

実施要綱 一、本事業は十個年計画にして耕地の面積は農家一戸平均四町歩程度とし内二陌を自作地創定とす 二、本事業遂行上所要資金は政府より低利資金融通の斡旋を仰ぐこと 三、本事業は全省に亘り一斉実行するは困難なるを以て尤も実行容易なる集団部落並に模範農村等より先づ実施せしめ漸次他へ普及せしむること 四、本事業実行は部落を単位とし其の部落に於ける協同組合（未だ設置せず）其の衝に当らしむること⁽³²⁾

東拓は地主から土地を買収し、それを小作をしていた朝鮮人が買うことになった。その際、土地執照（土地証書）は東拓が保存し、15年期以内に8厘から1分の利息で全部返せば土地執

照を取り戻すことができるようになった⁽³³⁾。

「東拓の土地はただ幾人か数十人を対象にいわば『自作農』集団に売り、個人を対象には売っていなかった。この集団を『楔』と言い、それぞれの『楔』には『楔長』一人を置き彼が土地を農家個人世帯に分配し、毎年の徴収の責任を負うことになった。」⁽³⁴⁾1945年の満洲国崩壊後「自然にその残りの返済はしなくてよいようになった」⁽³⁵⁾。

満洲国期A村の「東拓部落」という自然村落は農家13戸で、耕地は98.7日耕であり、その中、東拓は85.6日耕を所有、小作料は分益（折半）にして脱穀の後龍井まで搬入して納入した⁽³⁶⁾。東拓は秋の「検見日」に農村に出張⁽³⁷⁾するぐらいで、東拓地は村の「姜某という漢学の知識のある人が責任を負って管理した」⁽³⁸⁾という。

「東拓部落」以外、A村には「自作農部落」と呼ばれていた部落もあった⁽³⁹⁾が、東拓から借りた土地である。

このように満洲国期にA村の土地は主に劉、楊、孫氏地主及び東拓が所有し、そのほかは、幾人かの小地主が土地を所有し、村の人に小作させた。そして、村の土地所有関係は地主、地主兼自作、自作、自作兼小作、小作、雇農という状態が続いた⁽⁴⁰⁾。

A村の中国人地主と朝鮮人小作人との関わりは秋の収穫時を除けば、土地契約関係以外には、普段の交流はほとんどなかったと言われる⁽⁴¹⁾。

(32) 國務院総務庁情報処『省政彙覧第六輯 間島省篇』、1936年、371頁。

(33) 和龍県地方志編纂委員会『和龍県志』吉林文史出版社、1992年、242頁。

(34) 注(31)に同じ。

(35) 金 d y 聞き取り訪問、2000年5月3日、77歳。

(36) 前掲『農村実態調査報告書 戸別調査之部 第二分冊 延吉県 楊城県』560頁。

(37) 阿久澤よ志聞き取り訪問、2001年6月8日、83歳。

阿久澤よ志氏の夫は早稲田大学法学部卒業後、東洋拓殖株式会社に入社、その後間島支店に勤めていた。阿

久澤よ志氏は結婚後、間島に渡り龍井に住んだ。東拓は大正1918年龍井村に出張所を設け、九・一八事変（満洲事変）後間島支店となる。間島の農業経営と営農資金の貸付を主業としていた。

(38) 注(35)に同じ。金の証言によると姜某は土地改革のとき政治闘争を受けた。

(39) 金 o r 聞き取り訪問、2000年8月5日、71歳。

(40) 前掲『農村実態調査報告書 戸別調査之部 第二分冊 延吉県 楊城県』350頁、452頁。

(41) 注(20)に同じ。

三、土地改革の闘争過程

1. 民主大同盟の指導から「民運工作団」の指導へ

1945年9月元東北抗日連軍の姜信泰は中国共産党（以下中共と略す）延辺委員会を設立した。延辺委員会の指導機関は中共東北委員会（後東北局となる）であった。1945年9月末、延辺には延辺人民民主大同盟（以下民主大同盟と略す）が創建された。民主大同盟は中共延辺委員会指導下の延辺の基層組織として発展し、14万人以上の会員を有した。民主大同盟は警備隊に民衆を動員し、1945年11月中旬まで延吉県・和龍県・汪清県・琿春県に村、区、県レベルの三級政権を立てた。減租においては、農民を組織して「三七」（山地小作料が収穫の3割）、「四六」（平地小作料が収穫の4割）制を実施した⁽⁴²⁾。民主大同盟は「党の基層組織と基層民主政権が成立する以前、郷、鎮行政機構の役割を果たし、解放戦争に青年を動員する重要な役割をはたした。民主大同盟は使命を完了後、多くはその後工作団と土地改革工作隊に参加した。」⁽⁴³⁾のである。A村では民主大同盟の指導のもとで「解放直後地主から没収した稲を大体計算して村人に『青苗分配』をした」⁽⁴⁴⁾という。

しかし、1946年6月中共吉林省委員会が派遣した52人の民運（民衆運動）工作団が和龍県に到着して民運工作を展開し、8月和龍県委員会は民主大同盟を解散し、かつ村政権活動を中止させ、それに替わって民運工作団が土地改革を

指導するように決定した⁽⁴⁵⁾。したがってそれで村の基層政権工作にあたった民主大同盟は8月に解散した。A村で当時責任者をしていた金某は、まもなく朝鮮へ去った⁽⁴⁶⁾。

吉林省委員会には、政府から「960人の土地改革工作団」が派遣された⁽⁴⁷⁾。県の民運工作団（1946年7月工作団は「土改工作隊」と改称、以下工作隊と称す）は各村に入って村の政権の職能を果たす農会を成立させ、土地改革を指導した⁽⁴⁸⁾。和龍県委員会では『划分階級和階級政策講課提綱』（階級区分と階級政策講義大綱）を印刷発行して、農村各階級に対する基本政策を打ち出した⁽⁴⁹⁾。同年11月には二回目の工作隊が和龍県に派遣された。全県民運工作隊は整頓と補充を経て80人となり、そのうち老幹部（関内から来た人）は14人、共産党員は43人であった。1947年1月当時延吉県にいた吉林軍政大学の400人の学生も土地改革工作隊として参加した⁽⁵⁰⁾。当時中国共産党東北局の土地政策は「雇農、貧農をして中農と強固な同盟を結成させ、富農に配慮し、地主階級を弱体化し、一切の力量を集中して大地主、大漢奸、悪覇、土匪リーダーを打撃し、敵をあまりたくさん作らないことによって、反内戦の統一戦線を保持する」⁽⁵¹⁾ことであった。この中国共産党の土地政策は工作隊によって実施されることになった。

当時A村が管轄された東城区は13の行政村、総人口は1万5,390人で、中国人が1,546人、朝鮮人が1万3,844人であった⁽⁵²⁾。土地改革は工作隊の指導の下で行われたが、東城区の工作隊はつぎのような人物たちで構成された。

(42) 中国人民政治協商会議吉林省延辺朝鮮族自治州委員会文史資料委員会『文史資料選輯第一輯』延辺人民出版社、1982年、5頁。

(43) 張泰頤「宋振庭生平述略」前掲『解放初期的延辺』233頁。

(44) 注(35)に同じ、『青苗分配』とは土地改革前地主の米を没収して貧農たちに分配したこと。

(45) 前掲『和龍県志』621頁。

(46) 注(35)に同じ。

(47) 南起「延辺的土地改革及其歴史作用」前掲『解放初期的延辺』105頁。

(48) 前掲『和龍県志』622頁。

(49) 前掲『和龍県志』242頁。

(50) 前掲 南起「延辺的土地改革及其歴史作用」『解放初期的延辺』、102頁。

(51) 劉景安口述、夏隆德整理「土地改革的回顧」前掲『解放初期的延辺』、107頁。

(52) 和龍県档案館「東城区委各項工作中統計」1947年。

表－1 東城区工作隊幹部登記表⁽⁵³⁾

名前	民族	性別	年齢	家庭成分	本人成分	光復前の職業	光復後の職業	文化程度
徐 q	中	男	20	小職員	学生	学生	吉林政治学校で訓練	中学卒業
葛 c	中	男	20	小職員	学生	学生	吉林政治学校で訓練	中学卒業
金 h l	韓	男	24	佃中農	学生	学生	青年会及び公安員	中学卒業
許 S u	韓	男	38	貧農	農民	農業	農会主任	一般
金 d h	韓	男	34	佃中農	農民	農業	農会主任	知識分子
李 z h	韓	男	28	佃中農	農民	農業	農会主任	一般
金 h g	韓	男	27	貧農	農民	農業	公安員	小学6年
李 x l	韓	男	20	中農	農民	農業	民兵に参加	小学卒業
金 z h	韓	女	20	中農	学生	学生	家事手伝い	中学2年

この表から、工作隊員の年齢は若く、文化程度が高く、民族構成では朝鮮人が多数を占めていたことがわかる。漢族の二人は文化程度が高く、吉林政治学校で共産党の訓練を受けた知識人であった。家庭成分が小職員ということから地元の農民ではないと推測する。

このような「力のある人たち」で工作隊が組織されたので、農民も「偉い人たち」、「知識のある人たち」、「延安から来た人」と信頼し、貧農たちには「怖く見えた」地主と闘争することができたに違いない⁽⁵⁴⁾。工作隊は吉林省からだけでなく延辺の各県、各区からも派遣され、吉林省の工作団に協力して各村に入った。1946年夏、延辺行政督察專員公署は老幹部（経験が豊かな幹部）を中心として「下郷工作団」を組織し、それを延辺各地に派遣した⁽⁵⁵⁾。

2. 農会と貧雇農団

1946年村に来た工作隊はまず、「貧しい人たちと手を組んで、だれが貧しいかを聞いてその人を呼んで村の状況を聞き」、貧雇農を中心として農会を組織した。農会は工作隊の指導のもとで、村の土地改革運動を実行する組織であった。A村の農会は劉氏地主の庭に設置された。劉氏地主はその庭にある倉庫に監禁されていたと言う。当時村の農会には6つの小組があり、そこには411人の村の人が所属され、うち朝鮮人が390人、中国人が21人⁽⁵⁶⁾、農会会員は当時A村人口の4分の1に相当した。農会会長は当初は朝鮮人で佃富農の崔某という人で副会長には中国人で貧農の陳m hであったが二人とも免職され、その後もたびたび代り、1948年11月秘密に中国共産党に入党した貧農で朝鮮人である金 g tが「農会主任」（農会会長）であった⁽⁵⁷⁾。

土地改革初期の延辺では、農会幹部の一部に

(53)和龍県档案馆『東城区委員会土改闘争中被開地、富、反、壞名單及統計表、黨員發展、工作隊表』。なお、本論では、氏名に関してはイニシアルを使っている。「中」は漢族、「韓」は朝鮮族を示す。

(54)朱 r h さん（80歳、夫は当時の農会会長）は2000年7月31日訪問したとき次のように語った。「成分を決めるとき、工作隊が来た。漢族や、関内から来た人で、みんな知識がある人で、偉い人たちであった。身分も高い人であった。わたしは地主と闘争する時、行ってみたが、工作隊たちは、殴るとき急所を打たないよう

に言った。頭とか、腰とかを殴るとどうなるかを教えた。しっかりした人たちが後だてにいたから土地改革ができた。」

(55)金万錫「血染の歴史」前掲『解放初期的延辺』、67頁。

(56)注(53)に同じ。

(57)金 y z 聞き取り訪問、2001年9月1日、57歳（村の党書記歴任、父は土地改革の当時の幹部）。尚、佃富農とは、小作をするに十分な道具を持っている小作富農のことである。

表－２ 農家経営形態表⁽⁶¹⁾

区分 民族	地 主			自 作	自作兼 小 作	小 作	計
	甲	乙	計				
日	3	38	41	263	0	534	838
鮮	1,191	3,357	4,548	17,497	16,728	35,014	73,787
満	777	1,500	2,277	3,287	2,429	8,324	16,317
計	1,971	4,895	6,866	21,047	19,157	43,872	90,492

「不純分子」(佃富農、敵偽残余)が入ったが、「すべての権力は雇貧農へ」⁽⁵⁸⁾というスローガンが掲げられることにより、「不純分子」は免職されることになった。

1947年3月以降延辺には雇農農団が成立した。雇農農団は農会の指導機構で、村のすべての重大な事は雇農農団が決定し、農会は雇農農団の決定を実行することになっていた。

A村の雇農農団は33人で、朝鮮人30人、中国人が3人であった⁽⁵⁹⁾。雇農農団長は任某という人で、解放前には楊氏の小作農であった。農会には中農も参加させたが、雇農農団は貧農と雇農だけに限った。雇農農団たちは中農を軽視し、地主、富農から没収した「果実」を中農には分配しなかった。中農側から見ても「地主を打倒しても自分の利益とは関係ないと考え、傍観した」⁽⁶⁰⁾。しかし、30%ぐらい占める中農は「頭の働きがよく」農業技術面においても知識面においても無視できない存在であった。

3. 階級成分の確定

土地改革運動は土地のない農民に土地を分配し、政権を立てることであった。階級成分の確

定は土地分配と同時に行なわれ、基準は各階級の特徴によるものであった。農村における各階級の一般的特徴は次のようである。

地主は大量に土地を所有し、自分は農業労働に参加せず専ら他人を搾取する人で、彼らは農民ではない封建勢力である。富農は土地を大量に所有し自分も主な労働に参加する(土地はないが、十分な農具、牛を持っているのは佃富農である)。中農は主に自分の労働により、少量の農具もある。貧農は自分の土地がまったくないか、あるいは小規模の自作をしている階級である。雇農は土地、家、農具もなくほとんど労働力を売って生活している農村の無産階級である。

上記の各階級の特徴を基準に、土地改革はまず階級成分を確定してから闘争対象が決まり、その段階で土地と財産を没収し、土地のない雇農に分配することになった。ちなみに1943年延辺農家形態は表－2の通りである。

延辺の土地改革はおおよそ3段階に分けて行われた。第1次分配は1946年2月、第2次分配は1947年春、第3次分配は1948年2月である。第1次分配の時には「封建勢力を徹底的に打倒」

(58) 吉林日報1948年1月9日、「雇貧農代表大会開幕」。
この記事では延吉県第一次雇貧農代表大会の記事を記載した。記事によると、延吉県では1月6日雇貧農大会を開いたが、そこでは、「すべての権力は雇貧農へ」というスローガンのもとで、代表審査があり、そこでは、8人が不合格だった。そのなかの中農の4人は傍聴が許され、その他「帰順分子」、屯長の連絡員、学生(偽満時の銀行練習生)、成分不明な寡婦の4人は

即時追い出された。

(59) 前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、反、壊名単及統計表、党员発展、工作隊表』

(60) 安 s k 2001年9月3日、70歳、2回目の聞き取り訪問。

(61) 吉林省延辺行政督察専員公署建設科『延辺地区農業関係統計表1943年度』27頁。なお表中の「日」は日本人、「鮮」は朝鮮人、「満」は中国人を表す。

しなかったため、第2次分配でやり直し、そこで中農も闘争対象とされた「偏差」を、第3次分配の時に是正した。その間、階級成分が富農とされた人が是正されて「糾偏中農」になったりした。1948年3月土地改革が終わり、1948年10月和龍県では土地執照を発給した⁽⁶²⁾。それでは、A村においてこの3次の分配（農民は3次闘争とも言う）はどのように行なわれたのだろうか。

階級成分は主に前述の如く各階級の特徴と「光復前3年」間における土地所有および収入状況を基準とした。10年前に地主であっても3年前から地主ではない「没落地主」、「没落富農」といった存在は闘争対象から外されるべきであった。しかし、土地改革の深化にともない、「没落富農」の劉氏の二人の孫も闘争対象となったが、その後、1948年第3次分配の時「偏差」の是正で、中農とされた。A村の成分確定については次のような証言がある。

工作隊が来て搾取の割りあいを計算して、目印としての布をつけることになった。未成年は付けなくてもいいが、父母は付けなければならない。自給自足した中農は白い布をつけた。歌を歌って口号を叫ぶ時（地主を打倒せよと叫ぶ）には参加させなかった。いつか自分も闘争されるのではないかとびくびくしていた。赤い布切れは貧農雇農が付けるが、これは付けなくてもよいが、地主、富農は黒い布切れを必ず付けなければ

ならない⁽⁶³⁾。

それにとどまらず、村内では地主、富農、富裕中農（中農の中でも豊かな方）から物品を没収して農会にもち帰り貧農たちに配分した。その物品の内容は家屋、食糧、衣服、食器、牛などの農具である⁽⁶⁴⁾。雇農の崔某には「古い家屋が分配され」⁽⁶⁵⁾、貧農の趙某には食卓と日本軍の外套など⁽⁶⁶⁾が分配された。果実の分配は「合理的かつ簡単、迅速に実行されたが、群衆の意気込みを高め、引き続き闘争に動員する重要な方法であった。」⁽⁶⁷⁾

まず村内、そして次は村外にまで及んだ。「どこかほかの村に地主富農あるいは富裕中農があるとすると、歌を歌いながらその家に押し掛けて行って食糧を持ち帰って、農会で貧雇農たちが分けていた。これを『採糧』と言った。その人は殴られて死んだ。」⁽⁶⁸⁾という証言もある。貧雇農たちは積極的にこの運動に参加したが、このような「採糧」には村の中農は参加させなかった。

当時、中国共産党の政策は大きな地主を打倒し、中農はとりこみの対象とし、土地改革運動での「打撃面」を小さくするべく努めていたが、1947年の第2次分配の時には闘争対象が中農にまで及んだ。

中農のなかで解放前3年間において、一年の収入の内に25%の搾取があれば闘争対象となった。25%より高ければ富農（どれぐらい高いかははっきりした基準がなく、おおまかである）

(62)前掲『和龍県志』243頁。

(63)注(22)に同じ。目印の布は名刺ぐらいの大きさで農会より配布されたと言う。

(64)貧農の崔y rは2002年5月2日（80歳）訪問の時次のように証言した。「米を入れる米櫃を一つもらった。もともと富農のものである。富農は食器なども没収された。彼は富農になったあと糾偏中農に改定された。その時闘争を間違っていた。闘争委員たちが、村を歩きまわって、家財を集めて来て、闘争すべきでない人も闘争されたから、その後また没収したものを返すことになった」。中農には、「糾偏中農」と中農があった

が、文面で表すときには両方とも中農である。しかし、実際には中農と「糾偏中農」は区別がある。

(65)金s oは2002年5月2日（79歳）訪問した時次のように言った。「夫は崔某（佃富農）の家で雇農として働いた。わたしは解放になる前の年に嫁に来たが、家がない為崔某が自分の家を貸してくれて、そこで暮らした」。

(66)趙h r聞き取り訪問、2000年5月2日、63歳。

(67)吉林日報1948年1月6日。

(68)注(22)に同じ。

である。地主は自分の土地を全部他人に小作させ、自分は労働をしない人のことであった。

闘争対象とされた人は村の農会での闘争会で前に立たされ、罪を「摘発」され、「憤激した被害者に殴られたり」、「肉刑」を受けたり、財産を没収されたりした。搾取したものは供出しなければならなかったのである。富裕な中農の金h g家では労働力が多く大家族であったが、A村と遠くはなれたところに開拓地があり、それが遠くて耕せないため、ほかの人に耕作させた結果、25%搾取条件に該当したことになり、金h gの父はA村で闘争の対象となった⁽⁶⁹⁾。金h gの家では、牛を持って行かれ、どこかに財を隠していないかと責められたり⁽⁷⁰⁾した。村の「中農で闘争されなかった人はほとんどいなかった」と村人が証言するほど、1947年の土地改革深化は中農までに闘争が及んで、中農の利益が侵害される結果になったのである。

また、経済清算のほか政治清算もおこなわれた。満洲国の「敵偽残余勢力」の清算として、階級成分が貧農でありながら警察官等であった人物（後述）はやはり「政治闘争」の対象とされた。闘争会は激しく、「肉刑」が多く、その場で死んだ人もいるが、このような闘争を恐がって自殺した人もいる⁽⁷¹⁾。

このようなことが起きたのは、工作隊は大きな原則だけ言って具体的なやりかたについては、農民自身によるものであったからである。工作隊が闘争される人を殴らないようにすると、工作隊が地主を闘争させないと農民が不平をこぼす事もあったため、群衆を発動することとの間にバランスを取ることが困難であったことが言

える。A村では、「工作隊は殴っても死に至らないところをなぐるように言った」が、実際には農民の行動を完全に制止することができなかった。

当時土地改革闘争で、A村が管轄されている東城区の13個の村では24人が殴られて死に、5人が銃殺され、9人が自殺した。A村の闘争会で殴られて死んだ人は「破産戸富農」として闘争された劉d tである⁽⁷²⁾。そのほか、1人が銃殺され、二人が自殺した。

1948年の第3次土地分配の時は、このような行き過ぎた闘争の「偏差」が是正されることになり、「乱打」、「乱殺」の「肉刑」を「禁止」するように求められ、このような事態は発生しなくなった。

4. 政治、経済闘争の対象となった人たち

A村では朝鮮人の「漢奸」（「」は以下省略）である金某と没落地主である中国人の劉d tが闘争で死に至ったが、土地改革の深化にともない中農にまで闘争が及んだことは先述のとおりである。

漢奸とは日本軍や満洲国傀儡政権の末端支配を担当した人である。中国共産党は敵対分子としてまず漢奸を鎮圧し、旧来の支配層全体に対する闘争を実施した。当時の史料では漢奸については漢族、朝鮮民族を特に分けていなかった。「吉林省委員会の決定」では「党の農村における方針は、やはり大胆に群衆を発動して、引き続き『敵偽漢奸悪覇豪紳地主』の土地を分配し、敵偽残余勢力を肅清する」ことであるとした⁽⁷³⁾。また、龍井県志には「1946年4月下旬、延吉県

(69)前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、反、壊名単及統計表、党员発展、工作隊表』

(70)金h g（66歳）は2000年5月1日二回目の聞き取り訪問のとき次のように言った。「わたしの家では牛を没収された。父ばかりでなく、隠したものを言え、とわたしも攻められた。」

(71)金o r聞き取り訪問、2000年8月5日、71歳。金o

rは次のように言った。「土地がちょっとあるとして、富裕中農であると言われ、いまならなんともないですが、……闘争されると聞いたら、気が弱く、やさしい人なので、夫婦お互いに鎌で、自分たちで恐がって自殺した」。

(72)前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壊名単及統計表、党员発展、工作隊表』。

委は省（吉林省）・専署（延辺行政督查専員公署）から派遣された党・政・軍幹部に協力して370人の土地工作隊を組織して、各区で漢奸・走狗の清算と土地改革を展開した。龍井においては、初の漢奸清算大会を開き、鄭士斌、李今石、李鐘洙などの人を厳懲した⁽⁷⁴⁾と書かれている。そのなか鄭士斌は朝鮮人で（ほかの2人も朝鮮人であると推測される）あった。また、都市部では「文化漢奸」闘争もあり、おもに満洲国期に学校の教師をしていた人が闘争の対象となった。龍井には朝鮮族の中学校（国民高等学校）が3つあった。当時朝鮮族の中学校があるのは東北では、人口5万人の街である龍井だけであった。このような情勢のなか、中学校、小学校で教師をしていた人は闘争に耐え切れず、こっそり朝鮮へ逃げた人が少なくなかった。

農村の末端の段階において大衆を支配していた屯長のような有力者も漢奸として闘争の対象となった。これは国民党の「漢奸裁判」⁽⁷⁵⁾とは違うところである。罪状が重い漢奸は県政府による数千人数万人大衆の「公審」（公開審判）にかけていた。例えば、1946年10月30日延吉市西広場では1万人が参加した「海蘭江大血案」

清算大会が行われ、「1,700人の革命同志とその家族を殺害した」日本の手先である自衛団団長以下18人の犯人に、公判が行われ、死刑あるいは実刑が科された⁽⁷⁶⁾。

罪の軽い漢奸は区、あるいは村における闘争対象となった。A村では「金某が漢奸として闘争の対象になった」⁽⁷⁷⁾。金某は元々抗日運動をしたが、捕まえられ、唐辛子水を飲ませられて、お腹に板を載せられて脚で押さえられる酷刑を受け、耐えられず抗日運動をしないとやって牢屋から出たあともずっと監視され、中学校卒業程度の知識があったことから、自衛団団長、解放の一年前には屯長（村長）をした⁽⁷⁸⁾。「地主たちも彼を怖がっていた」⁽⁷⁹⁾という。「村の塩、布の配給を管理し、酒を飲んで人を殴ったことがあり、それで恨みをかっただろう」と言われている⁽⁸⁰⁾。この金某は殴られたあげく、最後には銃殺された⁽⁸¹⁾。金某の甥の証言によると「地主、富農を闘争したあと闘争の対象となった。日本の大きな手先であるトヨカワを闘争するとき（A村ではない）通訳もした。」という⁽⁸²⁾。

劉氏一族の中には満洲国期和龍県で「偉い職」についていたが、解放後逃亡した⁽⁸³⁾人もいる。

、(73)注(13)に同じ。

(74)龍井県地方志編纂委員会『龍井県志』東北朝鮮民族教育出版社、1989年、14頁。

(75)劉傑『漢奸裁判』（中公新書2000年）では、国民党の終戦直後から1947年10月までの「漢奸裁判」について克明に書いたが、これは中国人の歴史観に迫った傑作である。

(76)金万錫「血染の歴史」前掲『解放初期の延辺』73～78頁。海蘭江大血案清算大会は四日間にわたり行われ、39人の被害者が漢奸の罪を控訴し、最後には自衛団顧問以下団員7人は死刑、そのほかの何人は1年から7年の実刑を言い渡された。大会で中共吉林省副書記である張啓龍は「わたしたちは日偽（日本の傀儡国である満洲国 著者注）統治の14年を清算するだけでなく、また、すべての力量で蒋介石の進攻を粉碎しなければならない。抗日時期わたしたち漢族、朝鮮族人民は同じく血を流した。いま蒋介石が内戦を發動しているなか、漢族と朝鮮族人民は中国共産党の指導のもとで、一致団結して最後の勝利を勝ち取らなければならない」と言った。また、宋一平延吉県書記は「蒋介石は、偽

満洲国康德皇帝替わりに再び人民を惨殺しようとする、われわれは絶対に許さない。われわれは烈士の遺志を継承していま勝利の果実を守らなければならない。」と話した。

(77)趙h r聞き取り訪問、前掲(66)。趙h rの父は当時貧雇農団であった。

(78)注(70)に同じ。

(79)注(22)に同じ。

(80)趙h r聞き取り訪問、前掲(66)。父は土地改革の時村の幹部であった。配給制のときくじ引きをして、お皿とゴム靴1足をもらった。なお、2000年5月3日、金y sの聞き取り訪問では、金は次のように言った。「配給制の時くじ引きをしたが、わたしは村と学校で両方あつたから靴を2足もらった。靴は一回もらうと次の年にはもらえない。全村の人が全部もらうまでやった。」

(81)前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壞名單及統計表、黨員發展、工作隊表』。

(82)注(24)に同じ。

(83)鄭b j聞き取り訪問、注(20)に同じ。

そのほかは「3番目、4番目、5番目の息子が没落地主であるため闘争の対象とされ、5番目の息子の嫁も闘争の対象にされた」⁽⁸⁴⁾。劉氏の庭にA村の農会が設置され、そこで闘争会が行われた。漢族のための「通訳もいたが、彼らに発言権を与えることはなかった」⁽⁸⁵⁾。ベルトで殴り、劉氏一族の1人は殴られた末に死んだ⁽⁸⁶⁾。

当時村で闘争されるべきではない人が闘争されたケースは、「政治経済被闘争登記表」⁽⁸⁷⁾によると次のとおりである。

闘争された世帯主数は計38人で、中農が26人、貧農が12人である。そのなかには富農、没落地主、仲介人として「搾取条件」を満たして闘争された人以外は、牌長、屯長、警察、警護隊、自衛団団長、訓練教官、「威風」（小さなグループを結んで喧嘩したり人を殴ったりした人たち、以下省略）、貪汚（他人のものを盗んで仲間で分け合う）など「政治成分」が問題となって闘争対象になった人である。なかには富農であると同時に屯長をしていたから、経済的、政治的闘争対象になる人もいた。没落地主、富農のように「搾取条件」に該当する人たちだけでなく、貧農であるにもかかわらず「政治闘争」をされた人もいる。屯長、訓練教官、牌長、警察、警護隊、貪汚をした人と「威風」であった人であった。

このような闘争には明確な基準がなく、村の農民の「自発的」発動によるものが多かった。その背景には、「貧雇農路線」があった。中共吉林省委委員会は1946年10月、土地分配に関する決定のなかで、中農の利益を侵害する傾向は是正すべきで、偽満職員例えば屯長等を経験した一般の中農の人は経済的清算の対象とすべきではないとした。また「敵偽残余」を打撃し、敵

偽封建地主の統治を徹底的に覆すために、人々に恨まれた漢奸、悪霸、警察、官吏に対して鎮圧懲罰するのは必要であり、農会・自衛隊がこれらの人を逮捕する権利はあるが、個別に大きな罪のある人は「公審」にかける以外、一般的には寛大な方針をとり、あまり多く人を捕まえないようにすべきで、今後人を逮捕する時には県委員会に報告し、人を殺す時には県政府の許可を経るべきであるとした⁽⁸⁸⁾。

中共吉林省委委員会は1947年2月20日「省委関于分地問題的一些決定」の中で中農の利益を侵す傾向は、農村で大多数農民が団結し、特に中農と連合することに大きな不利益をもたらすもので、中農の利益を侵害した地区では「できるかぎりそれを補い、中農群衆の中での工作を強化し、中農をして土地改革の有利さを感じさせ、中農全体の真の同意と満足を得るようにし、雇農・貧農・中農の連盟を強固にし、火力を集中して『敵偽残余』勢力封建勢力と徹底的な闘争をすべきである」とした⁽⁸⁹⁾。つまり30%ぐらいの中農まで闘争の対象にすべきではないとした。

しかし、中共吉林省委委員会の決定は往々にしてすぐには下の方へ伝達されず、ずいぶん遅くなることもあった。例えば「省委関于進一步発動群衆分配土地的决定」文件は1946年9月「第一次群工会議」で草案とされ1946年10月21日正式の決定として文件になったが、すぐに印刷発行できず、奥付には「1947年1月9日印刷発行」とされており⁽⁹⁰⁾、村にまで伝達されるのは速くても1947年1月9日以後になったと考えられる。

したがって、村における土地改革運動の実行と中国共産党の政策決定との間には相当の時間的ギャップを伴って展開されることがあった。1948年1月第一回延吉県雇農貧農代表大会では、

(84)注(22)に同じ。

(85)朴b uの聞き取り訪問、2001年9月5日、68歳。

(86)注(72)に同じ。

(87)前掲、『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壞名単及統計表、黨員發展、工作队表』。

(88)前掲「省委関于進一步発動群衆分配土地的决定」65頁。

(89)前掲「省委関于分地問題的一些決定」183頁。

(90)前掲「省委関于進一步発動群衆分配土地的决定」67頁。

「中朝雇貧農」は一致団結して地主を打倒し、一緒に政権を立てることが強調され、「中朝関係」を挑発させる悪い人が「中朝人」のなかにあるか調べなければならないとした。また、中農を団結し、中農は農会には参加させるが、雇貧農団には参加させない⁽⁹¹⁾とした。このような党の原則に対して「工作隊は政策上の範囲だけ教えて闘争するのも自分たちでし、間違ったら修正し、時には革命の圧力が強いので、闘争しなくてもいい人も闘争の対象にした。」⁽⁹²⁾。

5. 「偏差の是正」と「土地の平等分配」

階級成分の確定では、25%他人を搾取すると富裕中農、それよりもっと上は富農、あるいは地主とされた。しかし、実際には明確な区分がなく、村ごとに異なっていた。一番大きな問題は取り込むべき中農までを打倒の対象にし、財産を没収したことである。1948年2月22日、中共吉林省委員会は中農以下の偽滿統治下で多少仕事をした人を「敵偽残余」とすべきではないとし、土地改革期の党の方針は徹底的に封建勢力を消滅し、貧雇農路線を貫徹し、中農と連合することであると指摘し、時には左、時には右の党内に存在する「偏向」を是正するように指示した⁽⁹³⁾。また、土地分配と中農自身の階級成分を決めるとき中農の意見を尊重すべきであること、中農も階級成分を区分するときに参加させ、表決権を与えたとした⁽⁹⁴⁾。村では富農になった人たちが「糾偏中農」に改定され、後には農会に参加させたが、貧雇農団には参加させなかった。また「禁止肉刑」（殴るなどを禁止）の指示をして、闘争で殴ったり殺したりすることがないように、誤りを直しながら、土地改革を遂行した。

1948年2月から土地を平等に分配する第3次土地分配が行われた。まず全部の土地を測定し、区政府が村と村の間の土地を調整し、それから再び全村人口に対して「平均分配」を行った⁽⁹⁵⁾。

吉林省土地分配原則と方法は「1、人口を標準とし、民族〔中韓人民は一律に平等に分配すべきである〕、性別、年齢を問わず人口によって土地がない、あるいは少ない農民に平均分配する。2、郷あるいは行政村、屯を分配単位とし、各村、郷の土地数量と質量の差異を考慮して区の範囲内で調整する。3、各種土地は収穫量を基準として等級を決め、数量と質量において平均分配できるようにする。4、群衆が同意した上で労働力がある雇農独身男については一般農民より2倍多く土地を分配することによって、所帯をもち農業に従事するように助ける。生産の便利のため、特に貧しい農民には多めに食糧、家畜、農具、家屋を分配し、道具が不足する農民にはできるだけ近い土地を分配し、特に貧しい革命軍人家族烈士家族には比較的良い土地を分配すべきである。」⁽⁹⁶⁾とした。

延吉県の土地分配経験は次のようである。

「第一、まず土地を測り、標準地を割り出す。農民大会を開き民主的な討論を経て、具体的なことについては若干の組に分けて詳細な記録をする。その後地質と常年の収穫結果を確定して1等、2等、3等、4等と等級を評定する。

第二、土地測定と評定の結果を公表し、1人あたりの土地分配を決定する」⁽⁹⁷⁾。

A村では水田は1等地～3等地、畑は1等地～5等地に分けて、一人当たりの面積を計算して平均して配分した⁽⁹⁸⁾。等級は自己申告で、土地の肥沃度、単位面積当たりの収穫量で測られ

(91) 吉林日報1948年1月9日。

(92) 劉z h聞き取り訪問、2000年8月10日、74歳。

(93) 吉林日報1948年2月29日。

(94) 同上。

(95) 前掲『和龍県志』243頁。

(96) 前掲「省委関于分地問題的一些決定」179頁。

(97) 吉林日報1948年2月28日。

(98) 前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壞名单』

表－3 A村の各階級状況⁽¹⁰²⁾

	戸 数	人 口	雇農戸数	貧農戸数	中農戸数	富農戸数
漢	24	108	3	13	5	3
朝	279	1,507	1	179	98	1
計	303	1,615	4	192	103	4

るが、正確な把握は實際上容易なことではなかった⁽⁹⁹⁾。

1948年3月、和龍県委員会は「すべての中農とあやまって闘争したことに対しては、政治的に帽子を取り（汚名を拭う）、名誉を回復させ、経済的に断固として賠償する」⁽¹⁰⁰⁾ように要求した。1948年3月28日中共中央東北局では土地会議を開き、東北土地分配運動の成績を肯定した上で、政策を厳格に適用しなかったことと、打撃面が広く、中農の利益を侵し、人を殴ったり、人を殺したりしたのが多すぎた「左」的偏差を指摘し、各級党組織は断固としてこれらを是正するように要求した。

1948年4月春土地改革が終了後、土地を測定し、土地等級を評定し、県政府は10月土地執照を発給して、農民の土地所有権を認め、「耕者有其田」⁽¹⁰¹⁾を実現した。その結果、1948年12月現在当時のA村の各階級状況は表－3のとおりである。

このような階級成分はその後長い間中国社会で個々人の出身成分を不動のものとして規定し

たため、人々は階級成分によって利益ないし不利益を被ることがよくあった。

6. 村人の移動

土地改革が始まって村から出ていく人がいた。地主、富農、満洲国期に高い職についていた人である⁽¹⁰³⁾。村を出たこれらの人たちは闘争されることがなかった。その他、元民主大同盟の人で、「村で責任者をしていた金某は朝鮮へ行き」⁽¹⁰⁴⁾、元抗日連軍の人で「金日成と一緒に革命運動をした人は北朝鮮に招かれて行った」⁽¹⁰⁵⁾。満洲国期に教師をした人は敵偽残余勢力とされ、採用されなかったため、朝鮮へ行った⁽¹⁰⁶⁾。

もうひとつのパターンは村内の移動である。丘陵の方に住んでいた人は土地分配の時平野部に引越し、平野部にある水田も分配された。さらに、もうひとつのパターンは他の貧しい村から比較的豊かなA村に親戚関係などを通して移住して来た人たちである。このような「移来人」戸数は6戸で、28人であったが、土地を分配されなかった。したがってこのような人たち

、及統計表、党员発展、工作隊表』。

(99)安 s k 聞き取り訪問、前掲(22)。安は次のように語った。「この村の土地を分配する時、私が手伝いをやった（小学校卒業生）。48年春か47年ごろである。トウモロコシの茎を挿しながら、後の人が100メートルのメジャーをもって測り、そこに一つ挿しながらその家の面積を計算した。間違いがあるだろう。分配する時、雇農は1級、貧農は2級、中農は3級、富裕中農は4級、地主、富農は5級であった。先ずよい土地を雇農にあげ、一番悪いのは地主、富農にあげた。」。

(100)前掲『和龍県志』243頁。

(101)同上。

(102)前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壊名単及其統計表、党员発展表、工作隊表』、1948年12月

現在の統計。

(103)注(64)に同じ。崔は次のように語った。「区の奉仕科にいた一人が行った。この人が紙に名前を書いて日本人の奉仕に行くように言うと言わなければならなかった。わたしは朝陽川にある日本軍軍部施設で麻袋を運んだが大変だった。「剃刀」と言われた日本人が酷かった。殴られたりした。もしその奉仕科の人がここに残っていたら殴られて死ぬはずである。」

(104)金 y s 2000年5月3日聞き取り訪問、72歳。

(105)注(22)に同じ。

(106)姜 h s 聞き取り訪問、2001年8月26日、87歳。姜は次のように語った。「わたしの義理の兄は解放前教師をしたが、解放後採用されなかったため、朝鮮に渡って行った。」

は「土地を買って農業を営んだ」⁽¹⁰⁷⁾。

村の人たちの証言によると1945年8月以降北朝鮮から「間島に移住する人がとても多かった」⁽¹⁰⁸⁾。安○yさん一家は朝鮮の生活が苦しく「間島では米のご飯が食べられる」と聞き1945年8月以降この村に移住して来たという⁽¹⁰⁹⁾。

解放後南朝鮮（当時の呼び方）に行ったのは闘争を避けて逃げた朝鮮人の「親日人士」、地主、元教師、満洲国の時代に官僚経歴のある人たちであった。当時朝鮮人は階級の祖国はソ連で、民族の祖国は朝鮮で、生きる祖国は中国だと言っていた。延辺のほとんどの人は長年生活した「生きる祖国中国」の延辺に残ったのである。

A村の一般の農民は土地改革で分配された土地を持って生活をしようと思い、村を出る人はほとんどいなかった。当時土地は農民のおもな生活源であった。

四、結 び

1. 土地改革がもたらしたもの

土地改革は土地「平等分配」によって満洲国の土地所有関係を根本的に覆し、新しい生産関係を生み出し、「耕者有其田」が実現された。土地改革を終え、土地がなかった多くの農民は土地を分配され、自分の土地を持ちたいという長年の夢を実現した。土地改革は農村における土地所有関係を根本的に変えることになった。それだけでなく、政治的に貧雇農が農村における中心階層になり、貧雇農の意識を変えるよう

になった。

土地改革はたんに階級成分の確定と土地分配だけでなく、農民を「喚醒」して中国共産党の指導の下に集結させる政治運動でもあった。「控訴」（貧雇農たちが地主などの罪を摘発する）によって農民が貧しかった原因は地主、富農の人為的搾取があったためであることを認識するようになった。貧雇農は経済的に「翻身」しただけでなく、政治的にも「翻身」した。貧雇農は指導的立場になる階級で、貧雇農のなかから中国共産党員に入党させたのである⁽¹¹⁰⁾。民族問題においては、民族区別なく土地が分配されたのである。

土地改革で、村の土地を正確に計り、平等に配分されたかについてはいくぶん疑問が残るが、小作農であった貧農たちが土地を持ち、村の指導的立場に立つようになったことが成果である。しかも国民党と違い中国共産党は村にまで入って農民を「喚起」し、中国共産党の政治支配に農民を結集させ、多くの農民が解放戦争に積極的に参加することによって、国民党を破ることができたということは、土地改革が持つ大きな意味と言える。

1945年8月下旬から延辺の元の抗日連軍の幹部たちは人民武装を設立していた。1946年夏東北民主連軍が延辺で軍隊を拡充するとき、20日の間に3,659人が軍隊に参加し、和龍県には1,536人、そのなか朝鮮人が90%以上しめていた。学校でも中学生が軍隊に参加するのが多かった。延吉市第二中学校は朝鮮人学校であるが、当年卒業生の中には131人男女が軍隊に参加し

(107) 安○y聞き取り訪問、2001年2月20日、66歳。

(108) 李 f s聞き取り訪問、2001年2月21日、67歳。李先生は次のように言った。「朝鮮では生活が苦しく、中国へ行けば米のご飯が食べられると聞き、一家ともにA村に1947年移住して来た。移住したばかりの時は朝鮮へ帰るように言われたが、証明（どんな証明か不明）を農会に出したら村の居住が許可された。当時中国から朝鮮へ行く人はいなかった。」

(109) 安○y聞き取り訪問、前掲(107)。安さんは次のよ

うに証言した。「中国と朝鮮間の国境鉄橋はソ連軍に占領されていた。荷物も検査された。ソ連軍の通訳にお土産をわたして橋を渡ることができた。」

(110) 前掲『東城区委員会土改闘争中被闘地、富、壊名単及其統計表、黨員發展表、工作隊表』によると当時秘密入党だった。1948年11月12月入党した金 g z と金 h z 兄弟は農会主任と教員をしていた。その後金 g z は長い間村の党書記を努め、金 h z は和龍林業局の工会主席をしていた。

た⁽¹¹¹⁾。1946年11月23日には延吉軍分区が成立し、姜信泰が司令員であった。解放戦争期間延辺から人民解放軍に参加した人数は5.2万余りで、当時朝鮮族は延辺人口の70～80%占めていたが、人民解放軍に参加した総人数の95%以上占めていた⁽¹¹²⁾。

1948年当時まで東城区で解放戦争に人民解放軍として参加した人は375人で、烈士は17人で、A村においては、解放戦争の時人民解放軍に参加した人は49人で、烈士は2人である⁽¹¹³⁾。現在A村の後ろの山に聳え立っている革命烈士記念碑に刻まれている名簿には、東北解放戦争に参加して生命をうしなった村人が7人であった。人民解放軍に行くとき衣服は軍服もなく自分の衣服、靴がなく、わらじを履いて行った。人民解放軍以外、村の多くの農民が戦線援護の運送隊・担架隊等に行った。

2. 土地改革過程における問題点

一方、土地改革では満洲国期まで農村を支配した地主、富農や満洲国期に勢力があった人たちが打倒された。まず大きな「漢奸」・地主・富農、次は中農にまで及んだ。その過程で、大まかな方針はあっても、具体的な規定がなかったため、村ごとに、工作隊、農会、貧雇農団の判断で行なわれた結果、誤った闘争もあった。特に中農にまで及んだ闘争は「当期中農の中には打倒されなかった人が少ない」といわれるほど打撃範囲が広がった。満洲国期にやむなく警察、牌長、訓練教官、警護隊をした貧農までも「偽満残余勢力」として闘争された。闘争大会では「民憤が大きい」人が特に闘争され殴られたが、一方、森林警察をしたことがあっても「やさしい人だから」闘争を免れた人もいる。

これをみると「階級分析適用の『ルール』」の要素については、社会に適用されていく過程において元来の政策の精神との間に様々なズレを生じさせ、その場その場で農村基層社会の現実に沿うように読み替えられ、土着化ないし現地化していった⁽¹¹⁴⁾という田原氏の指摘は妥当である。

土地分配も大まかであったことを否定できない。しかし、「知識のない農民がそれぐらいするだけでもよくやった」⁽¹¹⁵⁾と時代やその他の条件に鑑みて、評価する貧農たちもいる。

3. 土地改革後の課題

土地改革における富農に対する過激な打撃、特に土地の「平均分配」と「中農利益の侵害」によって、「平均主義思想が一部の農民の中で発展し、一部農民特に中農が生産を発展させようとする意欲に影響を与えた」⁽¹¹⁶⁾ことは事実である。土地改革を経て、富農になるのは怖ろしく、恥ずかしいことで、貧しいことが革命的で光栄である、といった考えさえ形成された。貧農、雇農は土地改革後、将来において分配がやり直されるのではないかと懸念し、中農は富農になることを恐れ、農具の購入をためらうなど、生産意欲は高くはなかった。地主、富農は農会によって強制的に労働に参加したが、消極的であった。また、生産に必要な農具、種などが不足し、解放戦争への動員もあって労働力不足をきたしたために、「組織」して人員を動員することなしには生産できないほどの状態であった。

土地改革で満洲国期の土地所有問題は解決したが、従来の営農「組織」を壊した後、どう新しく作り直すかという大きな課題は残されたままになった。

(111) 雍文涛「創建延辺根拠地の往事」前掲『解放初期の延辺』60頁。

(112) 雍文涛「創建延辺根拠地の往事」前掲『解放初期の延辺』62頁。

(113) 和龍県档案馆「東城区行政人口統計表」1948年。

(114) 田原史起『現代中国農村における権力と支配』一橋大学博士学位論文1998年、139頁。

(115) 注(35)に同じ。

(116) 前掲『中国近現代農村土地問題研究』575頁。

中国共産党は延辺で、土地改革をするなか、階級問題と同時に民族問題にぶつかったが、階級問題を優先させながら、同時に、民族問題も適切に解決した。しかし、実際に村で行われた土地改革のなか、満洲国期末端の支配者になった人が漢奸として闘争の対象になったり、没落地主が地主として闘争されたりした。中国共産党の政策は少数の大きな漢奸、地主が闘争の対象であったが、基準があいまいであったため闘争の対象が拡大された。しかしながら、「貧雇農路線」を貫き、解放戦争へ多くの貧雇農が参

加し、東北解放に貢献をしたのであった。

本論ではA村の土地改革の性格について明らかにしたが、その延長上に浮かび上がる課題は少なくない。土地改革後の状況をさらに追求していくことによって、土地改革がもたらしたものがより一層明確な輪郭を持つであろう。例えば、農民の生活がどれほど改善されたか、貧しい子供たちがどのようにして学校へ行けるようになったか、村の生産力はどれほど上がったか、こうした個々の具体的な調査をさらに継続していきたい。